

■ 第一章

触手が何本もちちに伸びてきて、僕の肢体に絡みつく。逃げる気なんてさらさらなのに、それでも、縛り上げられるように拘束されるのは、それだけでゾクゾクする。

裸体の僕の肌の上をまさぐる触手の種類は様々だ。左の乳首を吸引するように、カップ状の触手が吸い付く。

「ああん、母乳出ちゃう、ぼにゅうっ！ 射乳しちゃうう」

淫魔な僕は、性別でいえば、男の姿だけれど。魔界において性別なんてつまらない概念はどうだっていい。

右の乳首には、ざらついた縄みたいな触手が乳首に絡みつき、引っ張って伸ばすみたいに締め上げてくる。ああん痛い、痛いのがクセになるっ。

おっぱいだけでも気持ちいいって、触手たちもわかっていて、じりじりと焦らされていく。触手にも感情はあるし、性欲がある。それが魔界ってやつだ。

何種類もの触手があるってことは、いわば何人もの男に囲まれ、これから同時輪姦・強姦されようってしているってこと。ああ、考えただけでも頭がクラクラしてくる。僕のちんぼの先から蜜が滲み出し、僕は、横たわった地面に背中と羽根、尻尾を擦りあわせながら、乳首から受ける快感に悶えた。

「乳首だけ、やらあ。ちんぼ、おちんぼもおっ」

触手には耳がないけど。響く音を拾い聞き、それを理解することができる。

そこそこの太さのある触手数本が、僕のちんぼの根元をぎゅううと締め、簡単にイケなくししゅこしゅこちんぼを擦り上げてくる。あつあつ、気持ちいい。やつぱちんぼ擦られて扱かれるって気持ちいい。

淫魔の身体は貪欲だ。快感の甘受倍率は底知れない。だけど、よがり狂って死ぬことはない。

この快感は、まだ80パーセントにも満たない。これからもっともっと気持ちよくなっていくんだ。二本の触手がちんぼを、違う早さと強さで扱っていく。その傍ら、もう一本が鬼頭をくすぐりはじめた。

「先走りドロドロオ……」

僕のちんぼを濡らしていくのは、僕の先走りだけじゃない。興奮してきた触手たちの汁も、僕の身体を濡らしていく。それは、多種多様な媚薬。だからこそ僕は、複数種の触手に犯されるのが大好きだ。一種類の媚薬じゃ満足できないから。

淫魔な僕は毎晩のように、人間の元を訪れては犯されるんだけど。どれだけ性欲が強い人間がいたとしても、僕から見れば、「性欲が強い」にも当てはまらない。喘ぐほどの気持ちよさはもらえない。人間をその気にさせるために、わざと演技で啼いて、精液を絞り取る努力はしているけれど。「僕が。気持ちいいと思えるエッチ」なんて、人間相手には求めている。

淫魔として誕生したその日から、複数の触手相手に犯されて、年上で経験豊富な淫魔にマワされるような生活をしている僕が、たかが人間ぶぜいで満足できるわけ、ないじゃないか。

かといって。魔族相手なら、誰でも気持ちいいのかっていったら、そうでもなく。魔族にはいろいろ種族があつて、種族によつて「エッチの概念」が違うから、ぶっちゃけ、残念なやつも多い。

だけど僕の身体は。「生命力（HP）は、人間の精液から吸収。魔力（MP）は魔族の精液から吸収」するタイプの身体なので。人間と魔族の間をいたりきたりしては、犯されなきゃいけない。淫魔は、存在するだけで生命力を使うし、生命力を搾取するために魔力を使うから、いつだって忙しく精力集めに走らなきゃいけない。ただエッチしていればいいだけの気楽な種族と勘違いされがちだけど、これでもけっこう、忙しい身だ。

身体がカアアツと熱くなってくる。ちんぽの奥の方からジンジン疼く、満たされたい欲望。「ちんぽの奥、突っ込んで、掘り掘りしてえ〜」

一番細い触手が、鈴口の中に侵入してくる。ああああ、この、中に入つてっちゃイケないところに入つていくつていうのが好き。しかも、僕が手ずから育てた触手たちは優秀だ。尿道の中に入つたと思つたら、いきなり、空気を入れてデコボコにパンパンに膨らんで、奇妙に変形し、凸凹になり。そのまま歪な形状を保ちながら、スクリュー回転を激しく、優しく、してみせる。

「おぼおっ!? んっく! チンポ壊される! もっとお、もっとお!」

痛みなど感じないよう、尿道の中にビュッビュと吐き出されたのは、麻酔みたいな液体。それ以外の触手たちは快楽系の媚薬を吐き出しているから、僕が甘受しているのは悦楽だけだ。

ちんぽの中に触手が挿入されていくから、吐精という形でイクことができない。その代わりに

僕の乳首から、ドピュウウツと母乳が噴出された。おっぱいでイッてる、イッてる。

「はぁぁん、気持ちいい……」

頭の中、ハート乱舞って感じ。僕、淫魔に生まれてほんと、よかった。こんな気持ちのいいことに耽っているのが一生のお仕事なんだから。しかも僕は、インキュバスとサキュバスの間に生まれた、エリート中のエリートだ。食欲なまでに快感を欲することができる。その証拠に頭には、羊のようなツノがある。魔族の中でも格が低いとされている淫魔だが、最高クラスの淫魔だけが、この角を持っている。僕の誇りだ。

ああ、その、僕の誇りに。ちんこの形をあらかじめにした触手たちがすりすりしている。手コキ脚コキならぬ、ツノコキだ。こういうことをやってきていることは、僕のアナルにそろそろ挿入して、早く僕を使って触手たちも気持ちよくなりたいと思ってるってことは、触手たちにだって意思はあるし、欲もある。なにせ、僕が育ててるからね。イキたいって射精欲だってあるから、僕を急かすんだ。僕のお尻の中でぐちゅぐちゅ激しいピストンを繰り返そうと励むんだ。「今日は、どの触手をアナルに迎えてやろう？　ぶっといやつ三本にしようかなあ。それとも太さ・細さをバラバラにして、四本にしちゃおっかなあ〜」

射乳も終わらないまま、うっとりすると、僕の触手たちを見てやる。興奮して勃起しきった人間のちんぽみたいな触手たち相手に、アナルに入りきらなかったら、口に咥えてやろうとも考える。同時に何点攻めされたってかまわない。気持ちいいならそれでいい。それが淫魔の本能だ。

「邪魔だ、死ね」

「——あつ！」

僕が悩んでいる間に。僕をとり囲んでいた触手たちが、低く凍った声を合図に、一斉に枯れ果てる。僕の乳首に吸い付いていたヤツも、僕の尿道に入り込んでグルグル回転していたヤツも。

だから、「はあーっ」と深いため息をついた。

「ステイブンさん。僕の触手たちを枯らすのやめてって、いつもいつてるでしょう？」

「そんなこといったって。嫉妬しちゃうんだから仕方ないだろ！　ちんぽの中に触手なんか入れやがって！」

「あああんっ！　乱暴に引き抜かれるの、いいよおお！　尿道ズルズル引きずられるう！」

「この、くそビッチめ！　お前は俺のモノだっけいったらうが！　それなのに、触手の森でアンアン・アンアン喘ぎやがって！」

「ええー　淫魔なんだから、ビッチに決まってるでしょ。一人にミサオ立てたら、僕に精も魂も搾りとられて、そいつ死ぬじゃん。僕はステイブンさんをやり殺さないように、あり余った性欲を発散してあげてるんですう」

「嬉しくないって、だから、いつてるじゃないかつ！」

僕の身体の上で枯れ果てた触手たちを、「くそ、くそっ！」と、本当に悔しそうにとり除くステイブンさんは、すごく可愛い。とてもじゃないが、「魔王補佐・氷の魔導師」と呼ばれ恐れられている傷の男には見えないくらいだ。

ステイブンさんとは、僕が、先の勇者ご一行をやり殺した時からのお付き合いだ。レベル 50

の勇者たちを、宿屋で夜、襲い。精も性も生も搾りとり、あの世に送ってやった。その業績を讃えるため、魔王城に呼ばれた時に出会ったのがコトのはじまり。

『これは…… たしかに。淫魔族のサラブレッドは、魂を奪われるほどに愛らしいとは聞いていたが。これほどまでとはね』

ステイブンは、一目で僕を気に入る。

僕はいえ、魔王の補佐役を務める男の精液は、そこに込められた魔力のほどは、その味は、どれほどのものかと興味を持った。それ以上に。顔が、僕の好み、まんまだった。声が、鼓膜に響く度に、僕の腰を砕くんじやないかってほどだった。

形ばかりの儀典を終え、ソッコー二人してエッチに耽った。

結果だけいうなら。魔力ギンギンに漲りまくっている精液は、これ以上はないほど美味だった。これほどの甘露は初めてだっていうほど濃厚でおいしかった。魔力の質って、精液のうまさと比較しているんだよね。

ステイブンは、簡単に僕にやり殺されてくれない。それどころか、最高級魔力の込められた濃厚精子を与えてくれる、唯一の存在。

「淫魔なんだから、ステイブンさん以外とエッチ楽しんでもいいって。ステイブンさんだっていったじゃないですか。それなのに、なんで怒るかなあ」

答えるのわかってる質問を、わざとする。いわせたいから。

「それは、相手が人間だったらの場合！　きみの食事・生命力になる精液を搾取する必要がある

場合な!? 触手が出すのは媚薬だの麻薬だけだろ。ただの遊び相手じゃないか! イヤなんだよ、きみが僕以外で愉悦にずぶずぶ落ちてイクのは。生きるために必要な行為ならかまわない。だけど、暇潰しで、遊びで、誰彼かまわずセックスなんかしないで。たとえそれが触手相手でもだ!

「わがままだなあ。じゃあ、いわせてもらいますけど。いつも忙しくって、僕の相手もまともにできないのは、誰ですか? 僕が触手と遊ぶくらい暇を持て余してるのに、仕事にかまけて僕を放っておいてばかりいるのは誰ですか? ——その人が悪いと思いませんか?」

チクチク・チクチク、小針で突くように攻撃してやる。目の前にいるのが魔王補佐であろうと、「二人きりでエッチのことについて話している」限りは、僕の方が立場は強いんだから。

「……ん、ごめん、レオ。寂しい思いをさせてるのは僕だよな。嫉妬深いのも僕だし。こんな男、イヤになった?」

しゅん、としよげながら。僕の身体の上に飛び散った、媚薬だの触手それぞれが持つてる汁だのを拭いてくれるステイブンさん。拭いてくれるっていうより、ステイブンさん側がイヤなだけだから拭いてるだけだろう。自己申告するくらいの独占欲の塊ではあるから。

「あとはアナルに入れるだけ、てのを邪魔していくだけ邪魔して、なにもしていかない男は嫌いです。責任とって、僕にちんぼ突っ込んでイクなら許してあげますけど」

僕は優しいから、譲歩案を出してあげる。許してあげるタイミングを作ってあげる。ステイブンさんだって溜りに溜まつてるんだから、渡りに船ってやつだろう。ああ、僕はなんてデキる

淫魔なんだろう？

「お誘いは嬉しいんだけど。このあと、魔人会館で作戦会議なんだよ。僕がいかないわけにも、遅れるわけにもいかないんだ。今日は、顔を見にきただけ」

ごめんね、また今度ね、て。……なんだよ。なんだよ、それ。は？ この僕を前にして、理性を選びとろうって!? ふざけんなよ！

「ワープして、そこに向かえばいいだろ、作戦会議が始まる前にエッチ終わればいいだけだろ。それとも、なんですか。僕をイカせる自信、ない？ やっぱ触手の方が多機能だもんな。比べられるのは、さすがのステイブンさんでも分が悪い……わぁっ！」

左手首を強く捕まれて。あっという間にワープ移動させられた。ふふ、こういう単純な挑発に乗っちゃう可愛いところ、大好き。

移動先である魔人会館は、そこそこしつかりとした作りだった。さっきまで土の上に寝転んでいたから、いつの間にかステイブンさんに抱き締められているのもドキドキする。ワープ移動中、抱き締められたんだろう。

「ふふ…… ステイブンさん、僕の尿道から触手引きずり出した時から、ばっきばきに勃ってましたもんね？ やっぱ我慢はよくないと思うなあ。僕が気持ちよくイカせてあげますからねえ」

ダサイロープの奥に隠れた、オスとしての逞しい兆しに、着衣の上から触れてあげる。

「レオ、ここ、ロビー 誰かきたら……」

「そんなの知んない。僕は今すぐ、あんたと気持ちよくなりたい」

背伸びして、抱きついたまま、んーっとキスをねだる。僕に弱いステイブンさんは、最初こそ「どうするんだ」て顔をして悩むんだけど、キスくらいなら問題ないかと僕を許す。そう、キスくらいなら大丈夫。ペロチューくらいなら大丈夫。激しく舌を求め合う姿くらいなら、運悪く魔人の誰かに目撃されてもいいってね？ だんだんと、許していくハードルが低くなっていくんだ。だってステイブンさん、僕のこと大好きだもんね？

裸がデフォの淫魔な僕は、ステイブンさんの左足を両足で挟み、腰を押しつけ、ちんぽ押しつけ、擦り始める。

「ん……駄目だよ、レオ。これ以上は」

「ヤだ、知らない。ステイブンさん、偉い人なんだから。誰に見られたって黙らせてくださいよ」

グリグリちんぽを押しつけながら、腰をクイクイ上下に動かす。滑らかとはいえない素材の洋服に、勃起したままの敏感な部分をひたすら擦りつければ、カウパーがにじみ出すのはすぐだ。

「早く、ここで犯して。じゃなきゃ、あんたほったらかして。ぜんぜん知らない魔人のとこ、いつて。そいつから魔力もらってますよ。生命力は人間からとっていい、けど魔力はステイブンさんからしかとるなっていうたの、ステイブンさんじゃねえっすか。でも、当のステイブンさんが僕に魔力くれる気が毛頭ないんなら。僕だって、約束反故したって、責められるもんじゃねーと思うんですけど。違います？」

ヤル気を出させてあげるために、他の男の存在をちらつかせる。ここにどんな魔族がいるのか知らないが、相手なんて誰だって同じだ。僕は精液の中に込められた生命力と魔力にしか用はない。快樂も、あればなおよしだけど。

「きみだけだよ。僕をこんなに悩ませて、振り回すのは。やらしくて、我慢のきかない、困った子だな」

「手コキして先端濡らしたりしなくてもいいから。強姦するみたいに一気に、僕のアナル、貫いて」

待ちきれなくて、ハアハア浅い息をこぼしながら伝えれば。くるりと世界が回転し、ロビーの床にうつぶせに押し倒される。背後で、絹ずれの音がしたかと思えば。むにとお尻の双丘を掴まれ。ぐにいと、穴を露出させるように開かされた。なかなか踏ん切りつかなくせに、ヤルと決めたら強引なんだから。四つん這いになってあげよう。

空気に晒されたアナル、入口がヒクヒク反応してるところに、熱くてぶつとい肉の生々しさが当てがわられる。みちちち……じゅぽんっ！ と勢いよく、力強さだけでちんぽを押し込まれた。

「ああああんっ！ すごいよ、ああんう、熱くてデカいの入ってる、腹の中で暴れてえ！」

「久しぶりのレオの中は、熱くて狭いな。毎日毎日、ろくでもない人間のちんぽ咥えて、精液一滴も残らないくらい搾りとってるくせに、まるで処女みたいによく締まるよ。どうせ、ガバガバになるまでやってるくせにね？ 今は、ほら。こんなにガチガチに僕のちんぽ嚙んでるよ」

「ガバガバでバカなのは、頭だっ正しいたそう」

「違うよ、ごめん、レオ、機嫌なおして？　レオの好きなところ、強くゴリゴリしてあげるから」

「うううんっ、ゴリゴリ、ゴリゴリいつてるう、これ好き、好きい。このちんぽすごいのお！」

「しいい、声大きいよ、レオ。もうちよっと声、殺して。これじゃ見つかつちゃう」

ステイブンは、そこらの魔族と違う。僕と比べるまでもなく格も違う。僕が普段相手にしているような、理性のタカがすぐ飛んじやう、愚かな人間とは違う。下劣な魔族とも違う。それが、……腹立つ。

淫魔相手にこの余裕、腹立つ！　ヘソの下に力を入れ、ぎゅうううう……と強く、わざと締め付け続ける。

「レオ、駄目だよ。キツイ。こんなキツくされたら、すぐイク」

「イツて、僕の中にせーえきぶちまけて。ステイブンさんの魔力頂戴。特濃ザーメンと一緒に、早く注いでっ」

こんな男前でも、腰の動きはヘコヘコ、盛りのついたイヌと変わらない。ああ、僕の中にちんぽおさめて、イクためだけに腰を激しく振っている。なんて絶景だろう。ああ、オスの顔になってきた。わざと力込めなくっても、入口がきゅんきゅん締まっちゃう。ああ、気持ちいい。

「先イツちゃう、先にイク！　我慢できない、出ちゃううう……!!」

ガツガツとアナルを掘られ、その快感にぶるりと身体が震える。びゅるるるうう！　と、精液

が飛び出して、床の表面に飛び散った。

「きみは、イク時、名器って表現じゃ足りない、卑猥な肉壺になるんだから！　ざらざらの肉壁が、僕のちんぽに絡みつっぱなしで。吸い付いてきて。つく……僕、も、イク……！」

余裕のない、焦りの色を濃く滲ませた声で、恨み節を聞かされるが、今にはじまったことじゃない。さすがの魔界ナンバー2も、僕レベルの淫魔を相手にセックスしたことは、なくて。僕とのセックスは、調子が狂うんだそうだ。もっとスマートに僕を抱きたいらしいんだけど、僕は、こういうのが可愛いって思ってるから満足なだけなあ。僕相手に、ちよつと調子崩されながらエッチしちゃうステイブンさん、いいと思うんだけどね？　お仕事ばかりして千年生き続けるより、エッチいっぱいしまくりの千年の方が、ずっと楽しくって魅力的だと思わない？　しかも、僕とステイブンさんの身体の相性は悪くない。それどころか、ステイブンさんの体力は底なしだし、魔力だって最高値極めてるんだから、僕にとっては最高の相手といって過言ではない。いつてあげないけど。

「あ……んんっ！　お、く。熱いのビュービュー出されちゃってるよお……　すっごい熱い……　魔力いっぱいこもった、サイコーの男のせーえきが、僕の中でいっぱい出てる……」

この瞬間、僕の調子も、ちよつとおかしくなる。ステイブンさんが注いでくる魔力は強すぎて、僕の身には余るほどなんだ。そんな魔力を一気に注がれちゃったら、バカみたいに頭ん中がとろんとろんに溶けていく。気持ちい……　ずっとこのまま、ステイブンさんのちんぽ、ハメっぱなしにしてもらいたい。ずっと僕のこと貫いて、激しくガクガク揺さぶっては、奥にどび

ゆびゆって、濃厚で熱々のせーえき吐き出して、汚してほしくなる。その内、僕の狭い肉の中じや収まりきれなくなつたせーえきが、ちんぽ動かすたんびに、ごぶ、ごぽおって、わずかな隙間から掻き出されたり、漏れ出したりしてさ？ 内股が、派手におもらししちゃつたみたい濡れてくるまで犯されたい。……ああ、そんなん考えてたら、僕のちんぽも、またむくむくおっきくなつてきちゃつた。

それなのに。

「はあ…… 今日もサイコーだったよ、レオ。きみの中で果てると、とんでもない多幸感に襲われる」

ずるる……じゅぽん、と。僕の中で暴れていたちんぽが抜き出される。この時の喪失感ったら、他にナイ。こんなに硬くて長くて遅しく維持したまま僕を貫き、気持ちよくしてくれるちんぽ、ステイブンさんのだけ、だよ。

淫魔族随一のサラブレットとして、そんなこと、口が裂けてもいってあげないけど！

しかも、ほんとに、誰かがくる前に終わらせるなんて。生意気！ いくら相手が魔界ナンバー2だとしても。僕相手なら余裕なんかなくして、ただただ発情して腰のとまらないイヌになるべきなんだ。屈辱！ 淫魔ナメんな！

「そろそろ時間だな。じゃあ僕は会議室にいかなきゃだから。ワープ魔法かけてあげるから、きみは帰りなさい」

「……………イヤ、つす」

ぎゅ、と抱きついた。

「一回ぼつきりじや満足できない。ステイブンさんだって、ほんととそうでしょ？俺、あんたが俺のこと、『好き』なんて言葉じやたりないくらい、大好きなんだってことくらい、知ってるんだから。注がれる精液の濃さとか魔力の強さでわかるんだからな。他の相手でヌイてないこと、オナニーだってしてないんだろうなあってこと、僕一人しか相手にしてないこと！全部全部、わかってるんだからな！」

いい当ててやれば、齡何千年だっていう魔導師が、初心い子みたいに首とか耳までカアアと真っ赤にさせる。

好きとか。僕は淫魔だからわからないけど。一人に一途とか、意味わかんねえけど。ステイブンさんが僕に対して「それ」なのは見抜いてる。

そんなステイブンさんを、僕で、骨抜きにしてやりたいって。虎視眈々と狙ってる。だってそれは、たぶん、たぶん…… —……たぶん、なん、だろ？

わいわいと、誰かの話し声が聞こえてくる。恐らくは、これからステイブンさんと作戦会議を練るっていう魔人たちの声だろう。

「わかったから、レオ。会議終わったら、またきみに会いにくから。そしたら、この続きをしよう？だから今は、少しだけ我慢して？お腹が空いているなら、待ち時間、人間界に降りてきて——な人間、摘まみ食いして、人生狂わせてやってでもいいから。な？離れなさい」

こんなところで淫魔なんかとベタベタしてるの見たら、沽券に関わるとか思ってるんだろ

うか。

たしかに魔界で、淫魔の格ってやつは、そんな高くない。いいや、どっちかっていったら低い。僕が淫魔族のサラブレッドだろうが、それはいわば「下流の上」でしかない。そんなやつのが好きだなんて、氷の魔導師さまは、誰にもバレたくないだろうか。

「やつ、もうお着きでしたか、スターフェイズ殿。お待たせしてしまい、申し訳ございません」
「会議室はあちらに……？ その者は？」

やってきたのは、二人の魔人。いかにも屈強って言葉が似合う戦士っぽい。淫魔にもいろんなタイプがいるけど、僕はチビでちんくしゃで、筋肉もほとんどなくて、どっちかっていうとふにやふにやな手触りだから、こういった、鍛えているやつらの目から見れば、劣って見える存在だ。それでも、ツノの形で淫魔だってことはわかるだろう。裸だし。

「立ち去れ、淫魔ぶぜいが遊びにくるところじゃない。それに、スターフェイズさまは、淫魔の相手をするほど暇な方でもない。精液を搾取したいだけなら、こんなところじゃなく、下等な人間相手に、腰でも振っている」

しっしつと、あからさまな態度で追い払われそうになる。

「ああ、ごめんごめん。連れてきちゃったのは僕なんだ。この子は。僕の……」

当たりの強い魔人相手に、ステイブーンさんがフォローの言葉を入れようとしてくれる。

ステイブーンさんは、淫魔の相手をするほど暇じゃないって？ そんなん、——知ってんだよ！ 待っても待っても、忙しくて。ぜんぜん僕に逢いにくる時間もないことくらい、僕が一番

知ってんだよ！ 頭くるな、この魔人！

しかも、淫魔をバカにしてやがる。自分たち魔人より格下だっていつてやがる。現実見りや、格付けでは、そうなんだけど、そうだけど。僕はレベル1桁で、こいつらはレベル2桁後半なんだろうけれど。それでもめっちゃくちや頭にくる！

「ステイブンさまあ……」

普段は出してあげない、聞かせてあげない、特別甘えた声を出す。ダサイローブの端をきゅつと掴んで、媚びるような上目遣いを送る。

「この、失礼なやつらに。いつてやって？ 僕は、ステイブンさま専属の、淫魔族イチの淫魔なんだって。僕はステイブンさまの大のお気に入りで、お仕事中でも僕を抱いていたくらいに大切にしてくれてるって。実際、会議中にも僕を犯してやろうと思って、今、ここに連れてきたんだって。いつてやって？」

にこり、微笑む。僕のプライドが傷つけられました。それをなんとかできるのは、悔しいけれど、立場の偉いステイブンさんだけだ。本当は僕自身の手でぎやふんといわせてやりたいけど、魔王補佐のお気に入り失礼な態度をとったとわかれば、このバカだって、淫魔を下に見たことを後悔するだろう。

「レオ、あのね？ これから、次の勇者が誕生した時の対策を練る、重大な会議をするんだ。一人で戻りたくないなら、待っていて、いいから。そんなに怒らないで。大人しくしてて？」

僕が怒ってことは伝わってる。じゃあ、なんで僕の代わりに怒ってくれないのさ！

「……わかりました。じゃあ、ステイブンスさまの会議が終わるまで、ここにいます、他の魔人さんたち全員に声をかけて、輪姦してもらえるように頼んでみますね？ 代わる代わる僕を犯してもらいながら、いつ頃に気持ちよくしてあげられるように、頑張ってますね？ あーあ、本当はステイブンスさまに犯されたくて、僕のアナル、さつきからくぱくぱしちやってるのになあ…… 輪姦されて、たくさんの魔人の精液注がれるケツマンコになってこよぉ」

聞き分けのいい子のふりをして、いってやれば。人間から生命力を得るためにセックスしてもかまわないと割り切ってはいるが、「僕以外の魔族から、魔力の補給はさせない」と独占欲をぶつけてくる男の顔が、キレたように強張った。

キレたって知らない。本来淫魔は、一人の魔族からだけ魔力を吸いとったりはしない。複数の相手と好き勝手に交わり、多くの魔力を吸いとり、それを力に変える。それを「しないで」って、あんたがいってくるから。仕方なく僕は、その望みをかなえてやってるだけで。本当ならそんな望みさえ、かなえてやる義理はないんだからな！

ここに何人の魔人がいるかなんて知らないが、全員の相手をしてやるだけの気力・体力・性力が僕にはある。僕を犯した相手に「淫魔はサイコーの存在だ」と思わせてやることくらい、触手を育てる以上に簡単な作業なんだからな！

「わかったよ、レオ。僕の負けだ。……というわけで、この子の相手をしながら会議を始めるけど、仕事はきっちりしておくから」

「は？ ……は、はあ。スターフェイズさまが、それでよろしければ」

「話が早くて助かるよ。ほら、レオ。その柱に両手をつけて、尻をこっちに向けて、足を広げて？　んー、身長差のせいで、やりづらいな。頑張って背伸びしようか。そうそう、いい子だ」立ちバックでヤル気なんだ？　たしかに僕とステイブンさんでは身長差があつて。

でも、ステイブンさんが誰かの前で僕を犯すっていうのは、今までになかった行為だから、ハアハア興奮してくる。いわれた通り、めいっばい背伸びすれば。ズクンッ！　といきなりちんぽをハメられ。その快感に言葉も出なくて、爪先がふるふる震える。中で一回精液出されたから、腰を動かされる度、ぱちゅんぱちゅん、やらしい音が聞こえる。

ステイブンさんのものじゃない視線を感じる。「たかが淫魔ぶぜいが、スターフェイズさまにまわりつきやがつて」とか思ってたやつが、目の前の光景を「信じられない」とでも思いたがら見ているんだろう。気分がいい。もっと見せつけたくて、思い知らせたくて、わざと僕は喘いでやろうと考えた。

「ステイブンさまの極悪ちんぽ、レオの中でまたおつきくなってるっ。レオのやらしい肉、グリグリ挟ってる。あああん、嬉しいよお。ステイブンさまが気持ちよくなってくれてるの、すっごいわかる。嬉しいよお」

「なに、レオ。見られながらするエッチも好きだったの？　嫌いなわけないか、淫魔だもんないやあ、もっと見てもらう？　僕の腕に、両足引っ掛けてごらん。子どもがおしっこする時みたいに、大きく足開いて。持ち上げながら、突いてあげる。そうだ、レオの可愛いちんぽ、ピンピンに勃起してるの、見てもらおうな？」

駅弁スタイルじゃなくて。それこそ大人が、小さな子どもの膝裏に手を入れ、足を開かせ「シ―こいつこい」とおしっこさせるような姿で持ち上げられた。魔導師だからって魔法以外使えないわけないもんな、この男は。なんてったって、魔王補佐だよ。魔法しか使えない、無能者じゃない。力だってあるんだよ。僕一人くらい軽々と、子どもみたいに持ち上げちゃうんだよ。

「仕事中に、こんなことさせるなんて。この人たちにも迷惑かけてるよね？　ちゃんと謝ろうか？」

「あああ、根元まで挿入っちゃう！　この姿勢、根元までずっぷりいっちゃうよおお。んあっん、んあ、激しっ、真下からガツンガツン突き上げられる！　こんな駄目え、すぐイッちゃうよお。ステイブンさまの極悪ちんぽで犯されて、おちんぽミルクびゅっびゅっつと出しちゃう、淫魔のエッチな姿、どうぞご覧くださあい!!」

こんなこと、普段いわないし。「ステイブンさま」なんて呼んであげることもないからだろう。ステイブンさんも、かなり調子よく大興奮してる。こんな淫乱な子を、自分のちんぽで支配している姿を見せつけられて、一番嬉しいの、実はステイブンさんじゃないの？

「イクウ、イッちやうの！　ああ……んっ、りやめえ！　おちんぽミルクとまんないっ！　ステイブンさまのちんぽでズコバコされっぱなしだから、気持ちよすぎてレオのおちんぽミルク、とまんないのお！」

僕のことをバカにした方の魔人が、射精し続ける僕の痴態を眺めながら、ゴクリと生唾を飲み込む。

「さあ、会議をはじめようか。悦べ、レオ。この会議の間中、ずっとときみを犯し続けていられるぞ？」

やっぱ、ステイブンさんが公開プレイ、大好きなんじゃん。

でも、理由とかはどうだっていい。僕をバカにしたやつには「淫魔のすごさ」を見せつけてやれたし、久しぶりにステイブンさんとガッツリエッチできそうだし。会議がどれだけ時間かかるかわからないけど、ステイブンさんの精液、三発・四発くらいはご馳走になれそう。

ステイブンさんはエッチも上手で、気持ちいいし。「ステイブンさま」て呼んであげるのも新鮮で楽しいし。セックス奴隷かってくらい、気持ちよくさせてあげられる淫魔の本領を、たまには發揮してあげよう。

■ □ ■ □

僕がその淫魔と出会ったのは、今から二百年ほど前の話だ。

淫魔というのは魔族において、レベルは低く。そうだな、レベル4のスライムと、さほど変わらない。

だけど、どの組織にも「別格」ってやつがいるだろう？ キング・スライムみたいなもの。別格の淫魔には「マールさま」というのがある。どんな女も百発百中で孕ませ、どんな男のアナルも貫いたという。ある意味、ちんこの神みたいな存在。遡ればその血を受け継ぐのが、目の

前にいる小さな裸の男の子だといわれても、にわかには信じられなかったけれど。どっちかっていうと「すべての女に逆レイプされ。すべてのちんぽをケツで抱く」みたいな存在だなというのが、僕の第一印象だった。とても愛らしく見えた。

一糸まとわぬ姿だから見てしまうが、彼がぶらさけているのは「かの、マールさまの子孫とは思えない、慎ましやかな。到底、使いこんでとは思えない童貞ちんぽ」に見えたし。生意気にツンと勃った乳首も、ほんのり桜色。幼さの残る肢体は淫魔ということを踏まえても、「合法ロリショタ」だ。彼のレベルは7である。（ちなみに僕のレベルは9が五つ並ぶカンスト状態だといえ、彼の弱さがおわかりいただけるだろう）

そんなレベル7の、ヤラレっぱなし・犯されっぱなし・喘がされっぱなし・啼かされっぱなしが似合いそうな淫魔くんが。全員レベル50超えの勇者パーティーを、たった一人で全滅させた。

勇者だけは何度となく無条件で生き返ったが、その都度、目の前の淫魔と性交に耽り。精も根も尽き果てるまですべてを搾りとられ。やがては魂まで搾取され、神のご加護とやらで生き返ることもできなくなってしまった。つまりは淫魔くんのセックス・テクニクでメロメロになってしまった勇者が、自動的に破滅の道を辿ってくれたのである。

レベル7と侮って悪かった。さすが、マールさまの子孫。

たった一人で勇者を葬った功績を讃えるため、魔王城に招いたのだが。

クラウスは性に疎いからなにも感じないのかもしれないが、どうしよう。さっきからめっちゃ、その淫魔くんが、エッチしたそうにコチラを見ている。僕をだ。クラウスじゃなく、僕を

凝視している。「仲間になりたそうに、コチラを見ている」ではない。「エッチしたそうにコチラを見ている」だ。

湖畔を閉じ込めたような水色の瞳が、熱に浮かされたように潤んでいる。全身を桜色に染めながら、身体が中心が穿つのを隠しもしない。淫魔だから、こういうものなのだろうか？

「褒美をとらせよう、なんなりというがいい」

「え、なんでもいいんですか？　ほんとになんでもいいんですか？」

魔界のトップとナンバー2相手に、気取らない態度。教育がなっていないのか？　淫魔とは奔放な種族なのだろうか。レベルが違いすぎて、知り合いに淫魔の一人もない僕には、さっぱりわからない。

「だったら。魔導師さまのちんぽから、直接魔力を注いでもらいたいです。レベルカンストの、魔力たっぷり入った特濃精子で、お腹ちやぶちやぶになつてみたいです」

やっぱり、狙われてるのは俺じゃないか。

どうしてだ？　魔族の最高理想はクラウスだぞ？　どうしてこの子はクラウスじゃなく、最初から僕をロック・オンしてるんだ!?

魔王はさすがに恐れ多くて手が出せない（断られる可能性が高過ぎる）が、俺ならば手を出してもいい（魔王でお願いしますというよりは、OKをもらえる確率が高そう）と思われている？　ナメられている？　だとしたら、——キツイお灸をすえてやらなくちゃ。

「どうしてクラウス、……魔王じゃないの？」

「魔王さまのちんぽは、俺を葬りそうでイヤっす。押し倒された瞬間、それが『攻撃技』にカウ
ントされて、HPゼロになりそう。それに比べて魔導師さまは、相手の扱いがうまそうだし。め
ちゃイケメンだし。いい声だし。そのダボツとしたダサイ服の下に隠れた、引き締まった筋肉と
か見てみたいっす。ぶっちゃけいろいろド・ストライクすぎて、勃起とまらねえし動悸激しいし、
呼吸浅くなったまま、胸がきゅんきゅん締め付けられるのと同じタイミングで、ケツの穴が今、
クパクパしてます」

処女で童貞ですといわれたら、信じ込んでしまいそうな容姿をしているのに。さすが、淫魔族
のサラブレッド。いやらしい子なんだな。完全に勃起しても、愛らしいといってしまいたくなる
ちんぽからは、我慢できない・耐えられないとばかりに、向かい合ってしゃべっているだけだっ
ていう状態で、早くも先走りをダラダラこぼしている。

「ふむ。どうやら彼は、ステイブン。きみの魔力をご所望のようだが？ かまわないだろう
か」

確実に、「どういう形で魔力を注がれたいといっているか、理解できていない」クラウドが、
僕に判断を委ねる。

【最高に可愛い淫魔がエッチしたそうにコチラを見ている。ヤリますか？】
エロゲーのようだな？

しかも選択肢は【とうぜんヤル】【もちろんヤル】といった、どれを選んでも同じ結果だろう
というものだったので。僕は素直に【犯し尽くす】を選ぶことに決めた。

「いいよ。なんでも褒美にとらせると、クラウスが約束しちやったしね？　僕の魔力を彼に与えることにしよう」

「うむ、よろしく頼む」

「それじゃあ、淫魔くん。場所を変えようか。僕の部屋へ特別に、招いてあげる。僕の魔力、お腹いっぱい、食らうといいよ」

にこお……！　と嬉しそうに淫魔くんが微笑む。セックスしようかっていった返事がこの無垢な笑顔だなんて、そうだな、いわば反則だ。淫魔っていうのはどいつもこいつも、こういうギャップで相手を仕留めるのだろうか？

扱いがうまそう、という評価をされた。ということとは、優しく接してやった方がいいんだろう。僕としてはこの機会に、淫魔を、泣き叫ぶまでブチ犯してやりたいが。僕をド・ストライクとிட்டのだから、多少いい思いをさせてあげよう。

お姫さまだっこので僕の部屋にまで運んであげると、ベッドの上へ、そっと横たわらせてあげた。淫魔くん、なんて。ムードがないよな？　きみ、名前は」

「レオ……　魔導師さまは？」

「ステイブン。今夜は、恋人みたいにな、ずっと僕のこと、そう呼んでいいよ」

うんと甘やかした声色でささやく。それだけで軽くイキかけたんじゃないかって顔してるけど、イキやすい子なんだろうか？　でも、だとしたら、勇者ご一行を簡単に仕留められなかっただろう。淫魔としても失格だと思うし。

だからこそ、僕が本当に好みなんだろうなと信じることにする。

ちゅ、と額に頬に、それからくちびるに。敢えて軽いキスをした。最初から本気なんて、駆け引きじゃないだろう？

「ぷっくり膨らんだ、やらしい乳首だね？　可愛い色しちやって。弄られると、どんなふうに啼くのかな？」

「あつ、あつ、潰しちや駄目、んんん、こねくり回すのもダメ、引っ張っちゃだめ」

「ダメなことが多いね？　正直にいつてごらん？　ダメなの？　いいの？」

「気持ちいい……　淫魔だから、僕、いつも、気持ちよくさせて、ばっか、で。だから。気持ちよく、して、もらえるの、すごく、嬉しいよお……」

なるほど、淫魔という存在は、高性能ラブドールみたいに思われがち・扱われがちなんだな。性欲を満たすための相手としてしか認識されないから、優しさや労りに飢えているのかもしれない。なら、僕が与えてやろう。

「レオはいい子だね。だから、気持ちよかったら、ダメじゃなくて、いいとか、気持ちいいって、ちゃんと教えるんだ。わかった？　そしたら僕が、もったきみを悦ばせてあげるから。ね？」

乳首をつねったり引っ掻いたりして、感度を高めてから。カリッと軽く歯先を立て、噛んであげれば、喜びの声が素直に上がる。淫魔だとわかってはいても、なんていうか、処女を抱くみたいな気分だ。乳首を噛んで、きつく吸って、ペロペロと舐めたあと、次は、さっきより強く噛む。「乳首、気持ちいい。みんな、穴に入れること、だけ、急ぐから。こんな丁寧にされたこと、僕、

なくて。ステイーブンさん、すごく余裕あって、大人で。やっぱ、僕好み…… 好きになっちゃいそうで、怖い……」

「好きになるって、怖いことなの？」

僕も、恋愛感情を、特定の誰かに抱いたことはないの。わからない。

「怖い、よ。僕、淫魔だもん。好きな人、できちゃった、ら。好きな人以外と、エッチ、したくなくなっちゃったら。その人のこと、殺しちゃうかもしれないから、怖い、よ。生命力か、魔力か、どっちか、諦めて生きてくことなんてのも、できないし。相手をやり殺すか、こっちが衰弱死するか、だもん」

なるほど、そういうものなのか。たしかに、淫魔の性欲に合わせられるほどの性欲の持ち主というのは、人間では存在しないだろうし、魔族でも、ごくごく一部に限られるだろう。

淫魔は、淫魔同士で婚姻するのが通例だし。婚姻したあとも、生命力を求めては人間と交わり、魔力を求めては他の魔族と混ざり合うという。己のつがい負担をかけさせないためだと聞く。この人だと決めた相手には、意外に一途に愛情深いのが淫魔なのかもしれないな？

「大丈夫だよ、レオ。僕は、大丈夫だから。今夜だけは、わがままをいってごらん？ 今夜きみは、僕の恋人みたいなものだからね。なんでも褒美をとらせると、クラウスが約束して、僕の魔力をと、きみが望んだのだから。それを違えることはないよ。褒美をねだり間違えたと、後悔だつてさせない。安心して？」

両方の乳首を、たっぷり可愛がってあげながら。可愛さの中に妖艶さを忍ばせ始めたレオにい

ってあげる。

すると、レオがわずか、口ごもる。ん？　なんだろう。僕の前戯が、愛撫が、気持ちよくないとはいわせないぞ？

「あのね、あのね、ステイブンさん。僕、ご褒美にほしいもの、ちよっと、嘘ついちゃった」
……え、なに。やっぱクラウス、魔王の精液がほしかったとか。この期に及んで、のたまうつもりか？　首の骨へし折るぞ？　とはいわず、次の言葉を待つ。

「さっきもいったけど。僕、自分が気持ちいいエッチ、したことなくて。だから、本当は。ステイブンさんの魔力、ちんぽから注いでほしいのもあるんだけど、……ステイブンさんで、僕を、快樂堕ちさせて？　一目見た時から、あなたに、快樂でズブズブに溺れる僕にされたいって思っちゃって。でも、魔王さまがいたから、そこまでのこと、さすがにいえなくて。ステイブンさんに、気持ちいいこと、ちゃんと教えてほしいな、って。だから……ステイブンさんで、僕のこと、快樂堕ち、させてください」

——ヤバイ、これは。相手が淫魔だとか関係なく、クルな。セックスしまくってる子が、本当に気持ちいいことだけは、知らなくて。それを僕に教えてほしいっていうのは、すごく……そそる。

「きみは、最高に可愛くてエッチな淫魔だね？　じゃあ、こっからは、僕からのご褒美だ。教えてあげるよ、本当に気持ちいいこと」

くちびるを塞ぐと、今度は本気のキスをしてあげる。逃げるように動く舌を口の中で追いかけて、

絡ませながら唾液をすすりあう。そのまま、左手では乳首を弄り、右手でレオのちんぽをゆつくり扱き始めた。

口の中で小さく「あっ、んあっ」といったような声や吐息が漏れるが、大蛇のように、それらを飲み干す。舌先をぬちゅぬちゅと舐めて絡ませ、ちんぽに見立てて吸ってあげる。そのイメージは、淫魔たるレオには容易に伝わったんだろう。扱いてあげている手の中、まだ強さも早さも序の口だぞってところで、一度目の吐精がなされた。ディープキスと乳首責め、それから軽い手淫だけで淫魔をイカせられるなんて、いい気分だ。

ふはっと、僕の舌から逃れたレオは、大きく息を吸い。それから、いいわけするみたいな声色で、

「なん、で、こんな、簡単に。イツちゃうの、僕」

人間を相手にするより、どんな魔族を相手にするより、簡単にイクんだろう。それは、なかなか、いい報告だ。気分がいい。僕のこと、本当に好みなんだろうな…… 感じやすくなってるんだろう、悦び過ぎて。

「さあ、なんでだろう？ 胸に手を当てて、よく考えてごらん？」

僕は、自分の胸に手を当て、思い悩むレオの姿を想像していた。

だと、いうのに。なぜかレオは、僕の胸に、右手で触れた。

「……ステイブンの心臓、すげえ早い…… もしかしたら、僕のこと、好き？」

好き？ って。——それはこっちのセリフだろう？ と思ったけれど。薄く笑って言葉を封じ

る。

「そうだね、僕はきみが好きだよ、レオ。大好きだ。なんて可愛くてエッチな子だろうって、一目惚れだよ。淫魔のくせに、勇者一行をやり殺せるくらいセックスしてるのに、まるで処女みたいなきみが、とてつもなく可愛い。僕に快樂随ちさせられたいって、こんな幼い顔していうきみが、いとおしい。だから、どちらかだけが気持ちよくなるんじゃないか、一緒に気持ちよくなるう？　愉悅に歪んで、快樂に噎び泣くレオが、すぐく……見たい」

この子を僕で、グズグズにする。そう決め、レオの片足を持ち上げ、隙間に身体をねじ入れた。すぐさまレオの入口に、ちんぽの先でちゅっちゅっとキスしてあげる。そっこー突っ込むとか、しない。それって、今までの男とおなじだから。「この人は違う」と、差をつけさせたい。

敏感な部分でこすこすと、レオの入口の表面を擦る。尻肉に挟まれながら、僕のちんぽを扱いていく。こんなこと、された経験がないんだろう。すごい真っ赤になっちゃいながらも、アナルがヒクヒク、ものほしそうに反応した。

「ん……焦れたい、よ。早く……」

「んー？　なにを、どうされたいの？」

「お尻の穴、に。ちんぽ、ブチ込んで」

今までは、きつと。レオを前にすれば、すぐに穴にブチ込む男としか、やってこなかったんだろう。淫魔だもんな、前戯なんて、ほぼ、やってこなかったんだろう。精液搾取のメイン作業にばかり、力を注いできたんだろう。

でも、僕は。僕でこの子を快樂堕ちさせてやると決めたので。バカの一つ覚えみたいに、ただちんぽ突っ込んでやるだけなんて、芸のないことはしない。

「穴の表面だって、ちゃんとこうしてあげれば気持ちいいだろ？ それに、こうしてると。感じてる瞬間にレオのアナルがクパクパ開いたり閉じたりするのが伝わってきて、すごく、いとおしいよ」

「やだ、だって、恥ずかしい。こんな、誰もしなかったし、教わらなかった」

「だから僕が教えてあげるんじゃないか。今夜は無理に頑張ることないからね？ 気持ちいいことだけ覚えて？」

エロのエキスパートたる淫魔相手に、リードできる。伊達に数千年生きてはいないし、経験は重ねていない。まだ数百年しか生きていない若い淫魔をドロドロにできるなんて、そうそうできる体験じゃないぞ。

カリ部分で、尻穴の表面をこすこす擦り続けてあげれば、ひくっひくと、尻穴がくすぐったそうに反応する。僕の先端からもカウパーが垂れ始め、尻穴の表面がいい感じにぬちよぬちよと濡れてきた。

「先っぽだけ、挿入させてね」

「え、なんで、先っぽだけ？」

いいながらも、レオは。「ようやく、ちんぽ、くる」とでも考えたのだろうか、がばりと自分から大きく足を開く。股関節が柔らかいなあ。こんなに大きく足をM字に開けられるなら、この